

なぜ「しつけ」に悩まされるのか

増 田 翼

(2015年3月23日受理)

はじめに

厚生労働省「平成16年度全国家庭児童調査結果の概要」によれば、未就学児のいる世帯の59.5%、小学校1～3年生のいる世帯の58.8%が「子どものしつけに関すること」に不安や悩みを抱えており、これは子育てについての他の不安や悩みよりも割合が高い¹⁾。また、NPO 法人子育て学協会は、2013年にインターネット上で実施した「幼児期の子育てに関する悩み調査」の結果報告において、親の具体的な育児の悩みとして「感情的に叱ってしまうことが多い」「叱り方がよく分からない」など、「叱り方」に関するものが合計56.2%と、回答者の半数以上に見られることを強調している²⁾。このような例に限らず、子育てに関する種々の調査は³⁾、現代の子育て家庭がしつけに大きな悩みや問題を抱えている、と解釈できるような結果を提示することが多い。またそれを見る我々も、実感としてしつけが大きな悩みの種となっていることを改めて確認しているのである。

しかし、そもそもなぜしつけに悩まされるのであろうか。しつけに悩まされるとはどういうことなのであろうか。昨今のしつけに関する論稿のなかでも、この点について、総括的かつコンパクトに執筆している天童睦子(1957-)の「しつけの混乱」⁴⁾には、しつけを混乱させ、しつけ手を不安にさせる要因として〈しつけの型の喪失〉〈見えない統制の要請〉〈孤立型育児〉などの説明が見受けられる。〈しつけの型の喪失〉〈見えない統制の要請〉とは、簡潔に記せば、「定式化された地位と役割の型を親から子へと一方向的に伝達する」ようなしつけの手法(見える統制)が今や退

けられる傾向にあり、代わって「子ども自身の説明を求めながらしつけを行う」という手法(見えない統制)が普及している。その結果、しつけ手からすれば、しつけを通して子どもと真剣に向き合っているつもりでいても、その方法が曖昧で迂遠なため、しつけ手が理想とする「価値」「規範」の伝達が必ずしもうまくいかず、しつけ手・子ども双方がジレンマに陥っている、というものである。また、〈孤立型育児〉については、一人の子どもの育児に携わる人間(大人や兄弟)の数が減少し、家庭内だけで、しかも母親がその中核を担わざるを得ない傾向が社会全体に見られる、というものである。天童は、「家庭のしつけ機能の衰退や親のしつけ力不足を非難することよりも、子どもの世話と養育を家族内部に閉ざし親の責務を肥大化させてきた、『近代家族の子育ての閉塞』の道のり」を再考すべきだと論じているが、こうした指摘については、広田照幸(1959-)が著した『日本人のしつけは衰退したか』(講談社、1999年)をはじめ、類似の考えを多く目にするようになってきている⁵⁾。

さて、このように、〈しつけの型の喪失〉〈見えない統制の要請〉〈孤立型育児〉といった要因がしつけの混乱および不安を呼び起こし、しつけが悩みの種と化しているという捉え方は、現在、しつけを論じる際の基礎的前提として備えておくべきものである。しかし私は、もう少しこの〈しつけに悩まされる〉という現象を違う角度から考えてみたい。それというのも、しつけに悩まされるのは、これまで無意識的ながら生活文化に根付き継承されてきたしつけの特質が、世代間継承の減少により欠点を露呈しはじめている結果だと考えら

れるからである。はたまた、しつけ手を取り巻く社会の変化が、しつけの意味それ自体に新たな問いを投げかけ始めているという点もあるだろう。

本稿では、こうした課題意識のもと、しつけを「社会統制」という観点から捉え直してみたい。そもそも、社会統制とは以下のように定義される。

社会あるいは社会内部の部分集団が、自らの秩序を維持するために、その内部の個人や集団の行動に対して、法によって公式的に、あるいは集団行動によって非公式的に、逸脱を事前的予防や事後的懲罰によって抑止したり、同調を事前的奨励や事後的表彰によって促進したりすること⁶⁾。

ほかにも、社会統制の手法について、「同調を促進する正の制裁は事前的には奨励、事後的には表彰というかたちで報賞を与える。逸脱を阻止する負の制裁は事前的には禁止、事後的には懲罰というかたちで嘲笑・非難、暴力・法的処罰などを通して威嚇し剥奪する⁷⁾」などと説明される——主に社会学系の研究者がしつけを語る際に、「しつけ行為は、文化伝達と成員性形成、および秩序維持のための社会統制作用である⁸⁾」といった捉え方を提示することが多い——。今回は、この社会統制の〈手法〉に着目して論を進めていきたい。具体的には、しつけ＝社会統制を〈事前的禁止・奨励〉と〈事後的懲罰・表彰〉という二つの手法から捉え直していく。また、論の後半では、さらに〈環境管理〉〈環境介入〉によるしつけ＝社会統制にも触れることになるだろう。そして最終的には、しつけ＝社会統制という観点からの考察をまとめることで、〈しつけに悩まされる〉という現象について新たな知見を提出したいと思う。

なお、論を進めるに当たって、〈事前的禁止・奨励〉〈事後的懲罰・表彰〉や〈環境管理〉〈環境介入〉によるしつけ＝社会統制、などと毎回記するのは冗長なので、本文中では、それぞれ〈事前統制〉〈事後統制〉〈環境統制〉と表記したい。また、話の展開を考慮して、あえて〈事後統制〉〈事前統制〉という順番で論じていくことを先に断っておく。

I. 〈事後統制〉〈事前統制〉の特徴

1. 「実行させつつ、欠点を矯める」

——自習自得と〈事後統制〉——

あたりまへのことは少しも教へずに、あたりまへで無いことを言ひ又は行つたときに、誡め又はさとすのが、シツケの法則だつたのである。小さな頃から我々は自分の眼耳又は力を以て、この当然なるものを学ばなければならなかつたのである。……日本の伝統には、文字は勿論口言葉にも表はされないで、黙々と伝はつて居るものがあつたのである⁹⁾。

この文章は、しつけを論じる際によく参照される柳田國男（1875-1962）の論稿「教育の原始性」における一節である。もちろん、柳田の論に俟たずとも、民俗学の文献を繙けば、こうした論調に出くわすことは珍しいことではない。すなわち、しつけには、「まず“見習”わせ、その場に臨んで実行させつつ、欠点を矯める」というやり方、「“教える”よりむしろ“さとらせる”ことを主眼¹⁰⁾」とするやり方が存在するのである。とりわけ、伝統的村社会で成り立っていたかつての日本においては、大きく分けて「家」でのしつけと「村」でのしつけが存在したが、いずれにせよ「当然のものは、見よう見まねで自らに体得させ、踏みはずした場合」にのみ「叱責」を、すなわち「望ましくない行為の消去¹¹⁾」に努めるという〈事後統制〉が幅を利かせていたのである。

もちろん、こうした〈事後統制〉が浸透していたのは、かつての多くの庶民が田畑や漁で生活を立てており、家庭生活と社会生活（仕事）が密接に結びついていたのである。しつけ手からすれば、仕事の仕方をしつけることが、そのまま文化伝達および人間形成となるだけでなく、しつけ手の權威を維持することにもつながり、しつけ行為に一貫性と納得が伴っていた。共通の課題（仕事）を家庭内が共有しそこに信頼関係と師弟関係が生まれることで、〈事後統制〉は見事に機能したのである。これは、現在でも伝統芸能やサークル活動のように、明確な文化財の獲得が集団形成・維

持の主な目的となるような分野においては、ごく一般的な社会統制の手法だといえるだろう。

ところで、周知のごとく子どもは、周囲の大人を模倣して育つわけだが、その真似ぶ（＝学ぶ）という行為こそ、自発性に従った人間最大の原動力であることはいうまでもない。そしてまた、「模倣が主となるから子どもは失敗を通して学びとること¹²⁾」になる。つまり、〈事後統制〉が当然という社会では、子どもは周囲の大人から直接的に指図を受けるよりも、自らの感性と創意工夫にもとづいて物事を習得するという地盤が保障されていることになる。換言すれば、〈事後統制〉中心の社会には、子どもの失敗や軽微な逸脱をも寛容に受け入れるだけの素地があるということである。

しつけは実例を示すだけで一切の講釈を行わず、誤った行動をしたときだけ叱正する点で、子どもの自主的な学習と発見、「自習自得」を本質とするものであるから、これが可能であるためには、子どもに試行と反省、自己発見を許容する「ゆとり」が大人の日常生活の中になければならない¹³⁾。

子どもが「自習自得」のプロセスにおいて経験する失敗は、将来の大きな財産だといえる。冒険を主とする子どもの生活にとって、失敗の繰り返しが保障されていることは極めて重要なものとなる。かねてより「子は宝」とされてきた日本社会においては、おそらく子どものこうした「自習自得」のプロセスと〈事後統制〉という組み合わせが文化のなかで自ずと認められてきたのである。

2. 「順序だって指導する」

——講釈による〈事前統制〉——

しつけは、しつける者が内容を考えて、具体的に・個別的に、順序だって指導するところに特徴があります¹⁴⁾。

これは、2013年に出版された『しつけ事典』における一節である。先に引用した柳田の文章と比べればその違いが明確になると思われるが、前節で

触れた〈事後統制〉とは異なり〈事前統制〉は、大人の側がしつける内容がある程度あらかじめ用意しており、それらを極力、系統的に配置し実施しようとする点に特徴がある。さらにいえば、そのしつけられるであろう内容は、まだ起きていない（始まっていない）わけだから、将来的に社会統制が必要となるかもしれない事柄について「講釈」を施し「理解」を求める、という構図になってくる。冒頭で〈事前的予防〉や〈事前的禁止・奨励〉といった言葉を書いたが、まさに〈事前統制〉とは、あらかじめ「禁止」したり「奨励」することで「予防」的に逸脱を回避しようとする試みだといえよう。それはときに、家庭生活におけるあらゆることにまで及ぶ。家庭生活の大半のことは、育児書などを通して計画的に〈事前統制〉され得るのであり、こうしたなかでは、子どもはしつけ手の考えに基づいてしつけられ、さらに評価されることになる。

ところで、先に触れた〈事後統制〉とここで述べる〈事前統制〉とを比較すれば了解できるように、ことが始まっていない段階で「講釈」をきかされたところで、子どもの側にはそのしつけ内容に対する必然性が生じない。このことに関連して、しつけ状況を巧みに説明する柴野昌山(1932-)の言葉を見ておこう。

「しつけ」は、社会化エージェントと子ども・青少年などのしつけ対象とのあいだのネゴシエーション場面において、状況の定義づけ、カテゴリー化をめぐる行使される戦略行為(strategy)でもある。この戦略としてのしつけ行為は、あるしつけ目標の達成をコントロールの原理によって行おうとする説得の一形態である。……親や教師は、統制主体としては無力であるにもかかわらず、地位・役割関係におけるそのパワーの優位性を背景にして、自分たちが「望ましい」と考える認知・評価・判断の枠組を子どもたちにあてはめ、子どもたちがそれを受け入れるように強要しているにすぎない。その社会化＝統制的行为に正当性を与えるために、自分じしんのなかに納得(plausibility)のいくすじみちをつくり出す必要がある¹⁵⁾。

これは、〈事後統制〉〈事前統制〉どちらにも当てはまる内容ではあるが、引用文最後の「統制的行為に正当性を与えるために、自分じしんのなかに納得のいくすじみちをつくり出す必要がある」という箇所については、〈事後統制〉の場合当てはまらないといえるだろう。なぜならば、〈事後統制〉の場合、子ども自身がある程度〈文化獲得のズレ〉を体感しそこで生じる〈社会的葛藤＝生きづらさ〉に苛まれるような状況を経験しているからこそ、しつけ手からの箴言に「意味」が見出されるからである。〈事後統制〉の場合、大人の側が何か事前に用意して構えているわけではないし、即時的＝即興的な行為に過ぎないかもしれないが、少なくとも「価値」「規範」の伝達に明確な意味が伴っている。しかし、〈事前統制〉では、多くの場合、子どもにとってしつけられる意味が見出せない。つまりは、納得いかないのである。

しつけられても、子どもの側に「理解や納得」「創造的興味」がないという点については、1958年の段階で、牧野宇一郎（1920-）が的確に指摘をしていた——ただし、牧野は〈事後統制〉〈事前統制〉といった言葉は用いていないが——。

しつけが……しつけをする側で正しいと考えた「社会的制約」としての「外部的習慣」である限りは、子供がそれに対して創造的興味をもつか否かを保証することが出来ない……いかに自発性を重んじようとも、しつけはおたまたまじくしに地上を歩かせようとする如きものとなる¹⁶⁾。

子どもの内に〈社会的葛藤＝生きづらさ〉の経験もないままにしつけられるというのは、決して好ましい状況でないことは想像できよう。しかし、実際の子育て場面では、様々な理由から——次章で詳しく触れる——〈事前統制〉が盛んに実施されているのも事実である。「早期からの言葉による細部にわたる規範の説明や『講釈』は、頭で早わかりさせることはできても、教えられる者の『身につかない』。かえって子どもの思考と態度を受動的にして、主体的な批判力を失わせるおそれがある¹⁷⁾」といった指摘は、今一度しっかりと受け

止めるべきであろう。

このように書いていくと、〈事後統制〉〈事前統制〉という二つの手法によるしつけ理解は、さも〈経験主義〉対〈系統主義〉といった教育学上でよく見られる論争構造に類似していることが了解できよう。つまりしつけには、まずもって子どもに何でもさせてみて、それが極端に〈社会的葛藤＝生きづらさ〉につながったり逸脱が生じたという場合にのみ叱責するという〈事後統制〉派の態度と、むしろその正反対に、〈社会的葛藤＝生きづらさ〉に遭遇しないように大人の側がある程度先回りし予期的に順序立てて文化伝達しておくという〈事前統制〉派の態度の両側面が存在するのである。

上で参照した柳田は、実はこの点にも触れていて、先の引用文の続きに以下のように記している——この部分は見落とされることが多いが、私はたいへん重要な箇所であると考える——。柳田はいう。「シツケの最も盛んだつた社会でも、書物は固より精巧なる技芸や、天然現象の理解その他のやうに、積極的に言つて聴かすものが多かつた……結果から見れば国民は一人として、この表裏陰陽二通りの陶冶を受けて、大きくならぬ者は無いのである¹⁸⁾」と。つまり柳田もいうように、子育てには二つの態度があつて、一つには、ただ子どもと生活をともにした際、明らかに社会的常識に反する言動が見られた場合に「矯める」というものがあり、他方に、大人の側にはある程度明確な目的意識が存在し、何かを「積極的に」教えていくというものがあるということである。そのどちらの態度もあつて子育てなのである。ここでの柳田の指摘を受けるまでもなく、現代の子育てにおいても、この両輪のバランスが重要であることは当然であろう。干渉すべきでない場面や子どもに自ら悟らせることが好ましい機会というのが必ずある一方で、むしろ大人の側から積極的に語りかけることで文化の新たな一面を子どもが獲得するというケースもある。ただし、現在においては、子どもの軽微な逸脱をも許せぬために子ども自らの経験機会をますます奪い——〈事後統制〉の衰退——、さらに大人の側の介入が必要以上に求められる（そうしなければ社会的責任を果たすこと

ができない) 場面もあって——〈事前統制〉の拡大——、この両輪のバランスは大きく崩れてしまっているといえるだろう。

Ⅱ. 〈事後統制〉の衰退と〈事前統制〉の拡大

〈事後統制〉の衰退および〈事前統制〉の拡大は、なぜ生じているのであろうか。たとえばそれは、社会全体が、失敗や逸脱を許容しない雰囲気にも包まれていたり、危機管理の観点からも子どもに対して不特定多数の大人が関わることを避けるようになっていたりすることで〈事後統制〉が機能不全に陥っているなど、様々な要因が指摘できるわけだが、ここでは以下3点に絞ってまとめておきたい。

1. 家庭生活と職業生活の著しい乖離

(農村を中心とした庶民家族では：筆者補足) 各個人の帰属的地位に応じたしつけの目標が明確に規定されており、一人前へのしつけは、たえず、帰属的性格を有する職業のしつけと深くかかわっていた。現代家族では、職業選択の自由、大人と区別された青年期の拡大等によって、職業人としてより人間としてのミニマム・エッセンシャルズがしつけの内容となろう。しかしこれも、価値の多元化の中で、必ずしも一致したものではなくなっている¹⁹⁾。

現在は、大人でさえ、目の前の子どもが将来どのような道を歩んでいくのかよく分からないし、その将来を確実なものにする力さえほとんどもち合わせていない。漠然とした学歴社会に最終的には委ねるしかないのである。だから、文化の伝達者としての役目を果たすべき大人自身が何を子どもに伝承しているのか、伝承すべきなのかが不透明なのである。少なくとも、自分の知り得る世界をコツコツと伝承するだけでは、この子は生きてはいけないようだ、と知っているだけである。つまりは、しつける内容が将来との直接的つながりを失ってしまっているのである。

繰り返しにはなるが、大半の子どもが家業や芸

事をそのまま継承していく社会においては、なぜしつけるのか/しつけられるのかは双方にとって自明の理であった。だからこそ〈事後統制〉が機能した。まさにしつけは、「それぞれの職業分野における生活技術を体得させ、社会人として立つ態度を、自覚させる過程を意味していた²⁰⁾」のである。しかし、家庭生活と職業生活(社会生活)が著しく乖離している現代社会においては、しつけ行為によるしつけ手・子ども両者の納得感が得られにくく、結果的にしつけ手の権威は失われてしまっている。それでも、なぜ片づけなくてはならないのか、なぜ我慢しなければならないのか、について〈事前統制〉的にいってきかせるわけだが、どうにも不透明な状況を前に、しつけ手・子ども双方が空回りしているのは否めない。

ましてや、佐藤晴雄(1957-)がいうような「倒錯したしつけ」——基本的生活習慣等よりも社会的自立=進学準備等を重視する「しつけ」——が浸透しているのだとすれば²¹⁾、そもそもしつけとは何であるか、という原点からして揺らいでいるとも考えられる。たしかに、社会化のプロセスの間に大きな断絶がいくつも存在している現代社会においては、本来、その属する集団社会の内部で〈見習い期間〉のうちにしつけられていたであろうことを、一段階前のまったく異なる集団社会においてしつけている、という現状がある。たとえば、昨今盛んに謳われている「保幼小接続」や「高大接続」は、それぞれ上の学校組織に馴染めるようにあらかじめ適応能力を高めておくという要素が含まれているし、コミュニケーションスキル等を組み込んだ「学力力」なども、かつては就職後の〈見習い期間〉に仕事内容とともに〈事後統制〉的に覚えていったものの多くを高等教育機関で養成せざるを得ない現状を反映しているものといえよう。新参者を迎え入れ、しばらくの間は〈見習い〉としてしつけていく、という考え方がそもそも社会から消え去ろうとしているのかもしれない。新参者は、すでに能力的に完成されていなければならない、というのであれば、〈事前統制〉が拡大していることも頷けるのではないだろうか。

2. しつけ手の減少と肥大化する「個人化社会」

規範の安定性、子の共有思想は稀薄化し、村人等他人によるしつけが少なくなってきた。しつけが公的性格をうすめ、私事化してきたのである²²⁾。

しつけに関わる人数の減少は、明らかにしつけの「私事化」あるいは「個人化」を推し進める。その結果、しつけ手の中心人物は、自分が社会統制の大半の責任を負わなければ誰がこの子の健全な成長を約束してくれるのか、と肌で感じることになる。現代社会に生きる我々は、「もはや宿命にとらわれることなく、自分が行為の中心となる『設計事務所』となるが、目指すべき目標も曖昧になるため、つねに自己とはなにかを問いつづけ、選択や決定を行っていかざるをえない」。こうした「個人化する社会」においてしつけ手たちは、「社会のシステムの信頼性が低下し、リスクが増大している状況に不安を示し、子どもの生活が危機にさらされないよう、リスク管理の実践を試みる²³⁾」しかないのである。小さい頃の失敗を見ごしたがゆえに、青年期になった際に取り返しのつかないような逸脱行為を起こす危険性があるのだとすれば、あるいは逸脱行為とまではいかなくとも、学歴社会の評価基準から逸れてしまうようなケースが考え得るのだとすれば、仕方なくとも計画的に〈事前統制〉せざるを得ない現状があるのかもしれない。欠点があったら、気づいた大人が矯めればよい、などといった牧歌的な〈事後統制〉に任せていては、〈この子がどうなるか分からない〉のである。

3. 育児書の発展

子育てに関する経験科学は、たしかに日々進歩しており、その功績の多くは教育学や保育学における研究に還元されている。他方、そうした功績は、育児書・育児雑誌を通じて一般大衆にも広く流布していく場合があるが、これには注意を払う必要もある。なぜならば、ときに育児書・育児雑誌の記述がマニュアル化して、しつけ手たちの絶

対的バイブルとなってしまうからである。

たとえば、幼稚園教諭や保育士が子どもたちの生活援助を容易くこなしているように映るのは、彼女/彼らに専門的知識が身についているからという以上に、これまでの経験のなかで、何百人という子どもそれぞれの特性や、自分のかかわり方に対する反応の違いなどをからだ覚えていてからである。しつけに関しても、単なる一方向的な社会統制手法だけでなく、友だち同士の関係性から問題を解決するような高度な手法や、発達過程に基づく達成可能な課題を子どもに設定することで賞賛機会を増やすなどの専門的手法を多くもっている。このように経験豊かな幼稚園教諭や保育士が計画を立て意図的に子どもにかかわるのと、一般的なしつけ手（保護者）が子どもにかかわるのでは質が違うのも当然である。けれども育児書・育児雑誌の記述は、ときにそうした熟達者のやり方を、そっくりそのまま〈事前統制〉的にマニュアル化してしまうのである。

〈事前統制〉が拡大していくことの問題点とは何か。それは、まずもって意図や計画にそぐわないような状況下においては必ず葛藤が生じる、ということである。「何でできないの」「～するはずでしょ」といったしつけ手の側の意図と子どもの行動との食い違いによる苛立ちは、明らかに「悩み」を増大させてしまう。子どもは多少の逸脱を繰り返すものと認め、過度に望ましくない行為が見られたときにのみしっかりと子どもと向き合うがそれ以外は強く干渉しない、という〈事後統制〉の姿勢は、何よりもしつけ手の精神衛生上から見ても大切なのである。

しかし、ことはそう簡単ではない。何度も触れているように、子どもに対するしつけ手が減少し、大人の側にゆとりのない社会において、どうしても〈事前統制〉の必要に迫られるというジレンマは、多くの子育て経験者が感じていることなのではないだろうか。

Ⅲ. 第三の社会統制：〈環境統制〉

ところで、しつけとは、規範の内面化に向けた「規律訓練」のこと、と記されることがある。そ

もそも「規律訓練」とは、「学校や工場、監獄、病院など、あらゆる場で行われている」もので、ある特定の行動様式が身につくよう「価値」「規範」を伝えていくことで当人を変えていく「構成的」な側面をもった近代社会特有の権力の一種である。とりわけ「規律訓練」において特徴的なのは、訓練が施される際に、権力保有者の「視線」によって監視されることが重要だということである。この視線による監視は長い間継続されるが、訓練を受けるものが他律（他者コントロール）から自律（自己コントロール）へと変化を遂げるにつれて「視線の内面化」、つまりは規範の内面化が生じ、いずれ権力保有者から解放される日が訪れる。「小学校の教室では、教師がつねに目を光らせる必要がある」が「中学に上がり、教師の視線を内面化した生徒は、教師が不在でも学習を続けるようになる²⁴⁾」といった例を見れば分かりやすいだろう。ここまで見てきた〈事後統制〉〈事前統制〉は、まさに「規律訓練」の手段ともいえるわけだが、今述べたように、規範の内面化には複数の異なる「視線」を日々感じながら、成長に従ってそのうちのいくつかを取捨選択あるいは統合し自分の内面に取り込むというプロセスが必要となる。そのプロセスは、多種多様な人々との出会いや視線の取り込みを完了するまでの相当な時間を必要とするのだが、前章で見たように〈事後統制〉が衰退し、なおかつ少数のしつけ手による〈事前統制〉が盛んな現代社会にあっては、必ずしも「規律訓練」が完遂し得るとは思われない。こうなってくれば、なかには別の社会統制手法を考案する者が出てきてもおかしくない。ここまで何度も書いてきたような「一貫性」「納得感」や「必然性」を伴う必要のない、まったく別次元における社会統制手法の選択である。それが今から述べる〈環境統制〉なのである。

事前的予防には、逸脱動機の予防や、役割習得過程（社会化）での予防も含まれる。……そうした予防の方法には、内面に介入する「規律訓練」だけでなく、内面に介入せずに物理環境や情報環境のみを操作する「環境管理」も含まれる。個人の自由を尊重する

一方で、科学の発達によって物理環境や情報環境の操作が容易になった現代社会では、規律訓練よりも環境管理のほうが、社会統制の方法として普及していく²⁵⁾。

規律権力が、空間を基盤目に区切り、秩序化し、階層化することによって個々人を可視化し、監視して、監視のメカニズムを内面化させるべく個々人の内面へと働きかけるような権力だとすれば、環境介入権力は、偶然的要素が展開する場としての環境に介入し、その偶然性を統治可能なものに変化させ、環境を最適化、均衡化しようとするような権力である²⁶⁾。

ここでは、「環境管理」や「環境介入」と表記されている内容を、分かりやすくするために敢えて〈環境統制〉とするが、管見の限り、しつけと〈環境統制〉との関係について論じた研究が存在しないため²⁷⁾、以下では試行的にその特徴をまとめてみたい。まず基本的に、〈環境統制〉は事前に仕組まれるもので、環境に委ね、環境に語らせるように徹底した準備が行われる。未来を統制するために、子どもの行動し得る時間と範囲（空間）を想定しなければならず、その準備には膨大なイメージと労力が必要とされる。しかしその分、周到に準備された環境ならば、その環境下において子どもは大人と対峙することもなく社会統制されていくことになる。注意しなければならないのは、〈環境統制〉においては、人格の完成や基本的生活習慣の自立といった明確な目的が設定されているわけではない、ということである。とりあえず今を乗り切り、その場をしのぐことが〈環境統制〉の大きな特徴である。

ひとまずこのようにまとめたところで、具体的な〈環境統制〉の例を以下に二つほど提示しておきたい。

①虚構因果型²⁸⁾

これは、それまで安心して生活できていたはずの身近な環境に不安や恐怖をわざと持ち込むことで、社会統制していくやり方である。

一例として、昨今たいへん人気を博しているスマートフォン用アプリを挙げておこう。このアプリには、恐いキャラクターから電話がかかってきて子どもをおどかすという一連のストーリーが事前に組み込まれており、使用する場合は、アプリを起動することでスマートフォンのスピーカから流れる音を巧みに利用すればよい。

もちろん、こうした虚構的存在に恐怖心を煽られることで良い子になるよう促す、というやり方自体は、たとえば、秋田の伝統芸能「なまはげ」や福井の旧越廼村地区の伝統行事「あっぱっしゃ」など日本各地に古くから存在している。つまりは、決して現代特有の社会統制の手法とはいえないわけだが、他方で、伝統芸能のように一年に一度、といったペースではなく、ことあるごとに恐いキャラクターから電話がかかってくるという状況設定が可能になっているという点では、〈環境統制〉の一例として含めてもおかしくはないのかもしれない。

②行動限定型、人間関係限定型

〈環境統制〉のなかでも、もっともよく見られるのがこのやり方である。たとえば、普段の学校生活でいざこざが生じやすいA君とB君がいたとしよう。教員からすれば、A君B君が自分たちの力でお互いの関係を良好なものにできるよう支援したいところだが、他方で、多忙な業務や遅れの許されない授業スケジュールが背景にあるとすれば、次のような手法を取ることも十分考え得る。すなわち、ある授業におけるグループ活動の時間などに、A君とB君が一緒の班にならないよう、あらかじめ違う班に配置して準備しておくといった手法である。これに類似するような手法は、園生活・学校生活のあらゆる場面に存在しているはずである。

もちろん、こうした手法が良くない、といったいのではない。むしろ、なぜそのような手法を選ばざるを得ないのかという点が重要である。ここまで何度も論じてきたように、〈事後統制〉〈事前統制〉、すなわち「規律訓練」というのは、しつけ手と子どもが互いに向き合いつつも大人の側の「価値」「規範」を伝える行為である以上、その双

方が様々な軋轢を抱えることになる。特に、双方の関係が濃密で、それに加えて子育てしづらい社会システムや多忙な生活に苦しめられているのだとすれば、はじめから環境をコントロールし、その場で生じていたかもしれない葛藤状態をあらかじめ回避してしまうという〈環境統制〉の手法は、ある意味、とても自然なものにも思えてくる。

たとえば、かつては全国的に、乳児の子守をする人手が不足した場合などに「えじこ」という藁を筒形に編み上げた容器がよく用いられたが²⁹⁾、これなども行動を限定するという意味では〈環境統制〉の一部だといえよう。かねてより人間生活の様々な面には、こういった〈環境統制〉の要素が散見されたはずだが、それでも今よりは環境を統制することが容易ではなかった。それというのも、環境を統制するには予測を遅くし、起き得る可能性の範囲を見越したコントロールが求められるからである。そのため、たとえば柔軟な区画設定が要求されたり、資金が余計に必要だったりしたのだが、昨今のテクノロジーの進歩は、それらをますます可能にしつつあるのである。

まとめ

本稿では、しつけ＝社会統制を〈事後統制〉と〈事前統制〉という二つの手法から捉え直すとともに、〈環境統制〉について見てきた。最後にここでは、なぜ〈しつけに悩まされる〉のか、について本論を踏まえたうえで再度まとめておきたい。

そもそも「しつけ」それ自体は、人間誕生のころから行われてきたはずであるが、そのことに「悩まされる」かどうかは別問題である。かつて優勢だった〈事後統制〉のように、ある程度曖昧に、最低限の助力で実施されてきたしつけが、〈事前統制〉の拡大により計画性を帯びマニュアル化したことで、自分と他人からの評価から逃れられなくなるばかりか、不安や葛藤にも苛まれるようになってしまった。要するに我々は、わざわざ、しつけに悩まされるような状況に自分たちを置いてしまっているのである。

こうした社会の状況を日々感じ取っている者のなかから、さらに予防的な〈環境統制〉という手

法を選ぶことで、ひとまずしつけの悩みから解放されたいと願う傾向が生まれてくることは何も不思議なことではない。ここで敢えて〈環境統制〉が当然の社会を空想してみれば、なぜ今まで、様々なニーズを有している人々を無理してまで規格化された単一の空間に集めて「右ならえ」させてきたのか、という疑問もわいてくる。一つの価値観に従わせるべく我慢を強いるのではなく、むしろ不必要な社会的葛藤状態から解放し、一人ひとりに見合った〈滞りない環境〉を提供するという私たちの〈環境統制〉が、今後ますます進んでいく可能性は否定できない。もしそうなるとすれば、本稿のタイトルで示した、しつけに悩まされる、という現象はなくなっていくかもしれない。

しかし、今一度、「規律訓練」の世界観に立ち戻るとすれば、近代社会が求め続けてきた「自律」とは何であったのか、そしてまた、葛藤に苛まれながらも、しつけ手・子ども双方が「価値」「規範」を含めた文化伝達を日々行っていくという子育ての意義とは何なのか、これらを絶えず考察し続ける必要性に気づくのではないだろうか。今や、しつけに対する考え方は大きな分岐点に差しかかっている。〈事後統制〉〈事前統制〉〈環境統制〉、いずれを良しとするかによって、近い将来の日本社会のかたちは大きく変わるものと思われる。

【註】

- 1) 厚生労働省「平成16年度全国家庭児童調査結果の概要」
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/dl/h0630-6b.pdf>。
- 2) NPO 法人子育て学協会「幼児期の子育てに関する悩み調査」<http://kosodategaku.jp/wp-content/uploads/2014/03/38d2e046eb5052f98404c117a99bbff1.pdf>。
- 3) 子育てのなかでも、とりわけしつけに関する調査では、国立教育政策研究所が2001（平成13）年に行った「家庭の教育力再生に関する調査研究」や、ベネッセ教育総合研究所が定期的実施している「子育て生活基本調査」（第1回：1997・1998年、第2回：2002・2003年、第3回：2007・2008年、第4回：2011年）などが質問紙回収数3000を超える大規模なものとして挙げられよう。ほかにも、市町村単位でしつけに関する調査を実施しているケースも見られ、たとえば町田市教育研究所は、2000（平成12）年に「家庭のしつけ～親と子の意識のずれ～」という調査研究の結果を発表している。

このように、しつけに関する調査研究は様々な団体によってかなり頻繁に行われている。

- 4) 天童睦子「しつけの混乱」住田正樹編『家庭教育論』放送大学教育振興会、2012年、144-158頁。
- 5) たとえば、民俗学者の飯島吉晴（1951-）も同様の見解を示している。「現在、『しつけは昔に比べて衰退している』という言説をよく耳にする。しかし、事実は逆であり、村落共同体などの地域社会が解体し、学校がかつての信頼と支持を喪失してしまった今日、家族だけが一身に子供の教育の最終責任を負う状況になっているのである」と。飯島吉晴「しつけ」『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、web版（2015.3.23検索）。また、たとえば、日本教材文化研究財団が毎年刊行している『研究紀要』では、2002（平成14）年度から2005（平成17）年度まで、続けて家庭教育に関する特集が組まれているが、それぞれの寄稿論文を読み比べてみると、「家庭教育力低下」の要因を〈親世代の怠慢〉といったニュアンスで位置づけるものもあれば、広く社会的変動から捉えるものもあり興味深い。ちなみに、特集のタイトルは以下の通りである。「家庭教育の諸問題」（2002年度）、「家庭の教育力の復権」（2003年度）、「家庭の教育力の復権Ⅱ」（2004年度）、「家庭力の再生」（2005年度）。
- 6) 柴田悠「社会統制」大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂、2012年、603頁。
- 7) 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典 新版』有斐閣、1997年、269頁。
- 8) 柴野昌山「しつけの構図」柴野昌山編『しつけの社会学』世界思想社、1989年、22頁。
- 9) 柳田國男「教育の原始性」『民間伝承』第11巻第1号、1946年（再録『定本 柳田國男集』第29巻、筑摩書房、1964年、310頁）。
- 10) 竹内利美「しつけ（躾）」日本民族学協会編『日本社会民俗辞典』第2巻、誠文堂新光社、1954年、566頁。
- 11) 徳岡秀雄「庶民家族におけるしつけ」森岡清美・山根常男編『家と現代家族』培風館、1976年、82頁。
- 12) 柴野昌山「しつけ思想の変遷（1）」柴野昌山編、前掲書、222頁。
- 13) 和田修二『改訂版 教育人間学』放送大学教育振興会、1998年、74頁。
- 14) 谷田貝公昭・村越見監修『しつけ事典』一藝社、2013年、548頁。
- 15) 柴野昌山「しつけの構図」柴野昌山編、前掲書、23頁。
- 16) 牧野宇一郎「しつけ概念の検討」大阪市立大学文学会編『人文研究』第9巻第3号、1958年、23頁。
- 17) 和田修二、前掲書、75頁。
- 18) 柳田國男、前掲書、311頁。
- 19) 徳岡秀雄、前掲論文、95頁。
- 20) 竹内利美、前掲項目、564頁。
- 21) 佐藤晴雄「子どもの『しつけ』機能の再吟味」日本教材文化研究財団編『研究紀要』第35号、2006年、48頁。
- 22) 徳岡秀雄、前掲論文、95頁。

- 23) 杉原名穂子「個人化する社会と親の教育期待」石川由香里・杉原名穂子ほか編『格差社会を生きる家族』有信堂、2011年、169-186頁。
- 24) 東浩紀「規律訓練から環境管理へ」『情報環境論集 東浩紀コレクションS』講談社、2007年、36-50頁。規律訓練という考えをまとめあげたフーコー（Michel Foucault: 1926-1984）は、その著作、『監獄の誕生』（新潮社、1977年）において、「規律・訓練の行使は、視線の作用によって強制を加える仕組みを前提としている」（175頁）と書いている。
- 25) 柴田悠、前掲項目、603頁。
- 26) 佐藤嘉幸『新自由主義と権力』人文書院、2009年、69-70頁。
- 27) しつけに関してではないが、学校における「規律型管理技術」から「環境管理型管理技術」への移行について考察する中井孝章『学校身体管理技術—規律訓練から環境管理へ』（春風社、2008年）は参考になる。
- 28) 「虚構因果型」という名称については、以下の文献を参照した。戸田有一・宮脇亜由美「虚構因果型しつけ方略の研究（1）」『日本教育心理学会総会発表論文集』37、1995年、563頁。
- 29) 「えじこ」は、ほかにもツグラ、ツブラ、イズミ、イズメ、フゴ、イジコなど地域によって様々な名称で呼ばれていた。詳しくは、原ひろ子・我妻洋『しつけ』（弘文堂、1974年、38頁以降）を参照のこと。